樹

愛知県名古屋市　青山勇樹

たくさんの樹のなかにいると
光合成ができるような気がする
指先まで伸ばして腕をかかげ
降りそそぐ木洩れ陽にふれたら
爪がほんのり
うすあおいみどりに染まる
光だけで生きられたら
どんなにいいだろう
静かに目を閉じたまま
ずっと風の歌を聴いていられる
いつだったかひとりきり
なにも持たずに生まれてきたのに
抱えた荷物が多すぎる
いっそすべてを捨て去って
むきだしになったいのちこそ
たったひとつのかけがえのないもの
いのちのかたちで生まれてきて
ただいのちとして終わりを迎える
この美しい星を覆いつくす
かぞえきれない悲劇のなかで
いったいいくつの手が
光へと差し伸ばされただろう
そのたった一本さえ
握りかえす知恵も力もない
どうかあなたのぬくもりだけは
消えませんように
祈ることしかできないけれど
抱きしめることしかできないけれど

そうはいっても
あまりにもまぶしいと
なにも見えないから
やわらかな明かりくらいがいい
目をこらして見つめたほうが
きっと大切なものが見つけられる
たとえばよろこびの底に眠る
ちいさなひとつぶの涙
気がつけば私のなかに
立ちつくす一本の樹がある
雨の朝には葉をひろげ
風の夜には枝をふるわせる
暗がりのなかで黙ったまま
いつからかしなやかに育ち
空の青に焦がれつづける
名もない一本の樹がある
それならば
たったひとつのいのちとして
ここにあるすべてのものを
ひとつひとつ名づけていこう
出会ったときのように
初めてその名を呼んだときのように
おおでもなくううでもなく
もう一度あたらしく
そう
としか呼びようのない呼びかたで